

私の幼児教育論 XIII

神 沢 良 輔

三 保育の基本（十一）

—— 幼児とのかかわりあいの中で ——

(XIII) 幼児のせいにして、自分の保育の自己満足をしな

(1)

前回でみてきたように、“幼児のひとつひとつの行動には、それぞれ意味がある”。しかし、もし、保育者がこのような幼児の行動の意味について理解することができないとすると、そこには、いろいろの問題が待ちうけている。

そのひとつは、幼児の表面に出てきたみかけの行動だけで、その幼児や、その幼児の行動を判断したり、それをなにかの型にほめてレットルをはってみたりすることである。そして、その幼児をいわゆる問題児ということにきめこんで、“そのような幼児だから”ということで、幼児のせいにして、自分の保育の問

題点をすりかえて、自己満足するということである。

つまり、

“あの子は、反抗的な子”

“あの子は、落ち着きがなくなにしても長続きしない子”

“あの子は、ぐずでだらしない子”

“あの子は、わけのわからない子”

“あの子は、知能の低い子”

“あの子は、意欲がなくて集中力のない子”

“あの子は、自閉的傾向の強い子”

“あの子は、要求不満の強い子”

“あの子は、忘れ物の多い子”

“あの子は、ひとりでしか遊べない子”

などという会話が、保育者どうしの間で交わされることはないだろうか。

それは、保育者にとって、自分の保育がある特定の幼児によっ

てうまくいかなかったりするというような、きわめて危機的な場面に遭遇したときによくでてくることばでもあろう。もちろん、それは、必ずしもその幼児によってひき起されたかどうかというより、保育者がそう思いこんでいるということの方が多いのであろう。

たとえば、降園の忙しいときに、靴がなくなったりして、それをさぐすために自分のクラスの幼児の集合がおそくなったりすると、他の同僚に対する気がねも手伝って、

“ごめんね、迷惑かけて、帰りがけにまた〇〇ちゃんの靴がなくなつたのよ”

というようなことばをよく聞く。

ここまでは、まあ同僚に迷惑をかけたおわびと現状の事実の報告ということで当然のことであろうが、報告は、これだけで終らない場合もある。

“〇〇ちゃんは、だらしなくてほんやりでしよう。靴箱に入れただけどないっていうのよ。よく調べてみたら、靴箱に入らずに、テラスに放つておいて部屋へ入ってきたらしいのよ。みんなできがしたら、テラスのすみの方にバラバラになってあったの”

というように、〇〇ちゃんがいかに保育者を手こずらせているかの説明がつく。

そしてさらに、“あの子は、いつも忙しいときに、あれがない、これがないっていいだすのよ。ほんとにだらしがない。お母さんもだらしがないからね”

と、いうような平素の行動に対する保育者の不満がさらにそれにつけ加わる。

その上に、自分のクラスの幼児に向つて、

“あのね、みんなよく聞いて、〇〇ちゃんのように靴を下駄箱にきちんといれない子は、先生は靴がなくなっても知りませんよ”

と、こんどは、保育者の不満が幼児の方に向いていく。

(2)

このような保育者の気持はわからないでもない。でも、この保育者の行動をふり返ってみると、靴のないという事態におわれ、幼児とのかかわりあいの中で、その幼児を受容していこうということがなくなってしまう。いうまでもなくその幼児にとつてみても、降園の前になつて靴のないことを発見したときは、確かに大変なできごとであつたと思われるのである。だから、靴がないとわかつたときは、

“困つたね。先生も靴をさがしてあげましょうね”と、まずそ

の幼児の感情を安定させてあげるべきであろう。

しかしこのようなことのできなかつた保育者の行動には、降園前の忙しさということもあるけれど、その幼児はこれまでも降園前に、靴がないことがあった、また、その他の行動でもだらしがなかった、ということ、同じことをまたくり返したという、その幼児の行動や態度に対する不信感というようなものが、保育者の感情のどこかにあつたためではなかつたのだろうかとも思われるのである。

保育者も人間である以上、すべての幼児の感情を受けとめることは決して容易ではないことについては理解できる。もちろん、この例に示すような、靴のしまつについては、保育者が平素からのちよつとした心掛けで、注意をしてみてもあげていけば、このようなことにはならなくてすんだことではないのだろうか。

いずれにしても、自分の保育での問題点を、自分の保育の反省のために活用せず、"幼児のせい"にして、自己満足するといふことは、その保育者の成長にとつても、また幼児の成長にとつても、きわめて危険なことであろう。保育者を信頼して園にきている幼児たちが、このようなことによつて、心のさびしさを感じないようにならなければならないと思うのである。

(XIV) 幼児を先入観をもってみない

(1)

前述のように、自分の保育上の問題点を、幼児のせいにするこゝによつて保育者は、その場面でなんらかの自己の感情の安定を得たとしても、そのことは、その幼児にとっては、問題の解決にはなつていない、逆に保育者に対する不信感がめばえたということになるかもしれないことを、保育者は理解すべきである。

つまり、前項でみてきた靴の例でも、同様であるが、それがもし、他のどのような幼児についても保育者は同じような反応をしただろうかということである。

ある幼児の場合には、

"あの子今日どうかしてるわ。帰りがけに靴がなくなつてるのよ。もしかすると、だれかがいたずらしたのかしら"

というようになったとしたら、ここには、幼児のせいにするということと同時に、もう一つの問題が含まれているということになる。

つまり、この保育者は幼児に対して、"あの子なら"という先入観をもつてみていたということになるのではないだろうか。も

もちろん保育者にとつて、幼児の行動の予見をすることは必要である。そのために、ひとりひとりの幼児のパーソナリティや行動の特性・その変化などについて記録しておいたり、理解することはたいせつである。

しかし、それは、幼児の発達にとつて必要ならと、つまり幼児の可能性を、幼児の行動の中から発見し、幼児が自己実現できるための援助としての、幼児の行動の予見としての役にたたなくては意味がない。

それは決してあの幼児はこういう幼児なのだから、という先入観をもって決めこむことは異質のものだということができ、また、そのような先入観をもつことによつて、本当のその幼児の姿を見失うということになってしまうということになる。つまり、先入観をもってみるということとは、一方では、偏見をもつて幼児をみるということにもつながるといふことになる。

(2)

幼児を正しくみるということは、保育のもつとも基本となることであろう。それは、ありのままの幼児を、ありのままにみられる保育者でなくてはならないだろう。また、このような見方ができるためには、ひとりひとりの幼児のすばらしい可能性を信頼

し、幼児と同じ立場に立つて、ともに生活する中から生まれてくるものでなければならぬ。

それは、また幼児と自分とが一体であるという、保育者の信念や体験の中からでてくるものでもある。

「今日は、幼児とびったりうまくいった」という保育者の喜び、体験の中には、保育者の幼児に対する先入観の入りこむ余地はないと思われるし、その中で保育者自身も自己実現でき、幼児とともに発達していくことが可能になるのではないだろうか。

それは、決して、特別になんとかしたという作為の中でできるものではなく、やはり、きわめて自然な保育の中に、自然になれるものであろう。私などは、現場にいるとき幼児とともに生活しようという努力はしたつもりではあったが、それは努力したということだけで実際にはそうなっていない自分を発見することばかりであった。しかし、一方では、保育者たちが、幼児のことについて、幼児の外側からみて、得意になって話し合っているのを聞くと、とてもかなしい気持ちになって保育者に対して、何もしてあげられない自分に対するいらだたしきを感じることも多かった。

やはり、保育者の幼児とともに生活しているという実態のなかで、本当の幼児を理解するために、努力することがたいせつであらう。(つづく)

(暁学園短期大学)